

公開シンポジウム

AI時代の言語教育

言語学習の 光と影

第一部：10：30－12：00 (B-303)

特別講義

「コミュニケーションに苦労しますか？－現代社会に生きる社会言語学－」
井上逸兵 [慶應義塾大学]

私たちは「言い方」ひとつで印象が変わり、同じ内容でも通じたり、こじれたりします。問題は語彙や文法だけでなく、場面・関係・期待のズレにあります。社会言語学は、敬語、沈黙、雑談、言外の意味、役割語、指標性(indexicality)などを手がかりに、ことばが社会の中でどう働くかを解きほぐします。職場のメール、会議、SNS、多文化のやりとりに生じる「違和感」をデータとして捉え、「なぜ今それが問題になるのか」を社会の構造と結びつけて説明します。言語環境がAIやメディアによって更新され続ける限り、社会言語学は実践の知であり、同時に更新され続ける学問でもあります。

会場

山口県立大学
B-303
C546 (ALS)



問い合わせ：西田光一 knishida@yp4.yamaguchi-pu.ac.jp

シンポジウム
オンライン同時開催 / 参加費無料

2026年
2月4日(水) 10:30～15:00

第二部：13:00～15:00
(対面 (C546)・オンライン同時開催)

シンポジウム

シンポジウム趣旨説明

西田光一

[山口県立大学]

立部文崇

[周南公立大学]

01 AI時代の日本語教育

－「学習の個別化」と「社会的つながり」の観点から－

02 思考力と価値判断を鍛える言語教育のあり方

－AIの勃興の中で－

03 AIはコトバを理解しているのか？

04 AI時代に外国語を学ぶ意味

05 日本語の漢字学習デジタル教材

－「かんじのがっこう』－

全体ディスカッション

まとめと閉会

岩中貴裕

[山口県立大学]

林炫情

[山口県立大学]

申込はこちら▶

締切：2月1日(日)

※オンライン参加の方は必ず期限までにお申込みください。

※会場参加の方は当日参加も可能です。



本取組は、令和7年度山口県立大学の研究創作活動の助成を受けたものです。

01 AI時代の日本語教育—「学習の個別化」と「社会的つながり」の観点から—

言語

02 思考力と価値判断を鍛える言語教育のあり方—AIの勃興の中で—

LIGHT

03 AIは言葉を理解しているのか?

影

04 AI時代に外国語を学ぶ意味

FUTURE

05 日本語の漢字学習デジタル教材「かんじのがっここう」

か
ん
じ
の
が
っ
こ
う

立部文崇（周南公立大学）



周南公立大学情報科学部准教授・地域共創センター副センター長。専門は日本語教育と日本語文法。地域のコミュニケーション課題を教育に橋渡しする実践を進め、図書館・高校・自治体との連携プロジェクトを多数担当。教育の個別性を支える学習アプリ「Fingerboard」の開発にも参画し、デジタル技術を活用した学習環境のデザインに取り組んでいる。

多様な背景を持つ住民が日常的に日本語でやりとりする場面が広がっています。AI時代における地域日本語教育を、「学習の個別化」と「社会的つながり」の両面から考え直します。図書館・高校・自治体との連携や学習アプリ「Fingerboard」の開発経験を踏まえ、地域と学びを結ぶ新しいデザインを探ります。

松下達彦（総合研究大学院大学）



名古屋市生まれ。博士（Victoria University of Wellington）。桜美林大学、東京大学を経て、現在に至る。専門は応用言語学、日本語教育で、特に語彙の学習・習得。ウェブサイト上で、各種データベース、語彙リスト、語彙頻度プロファイラー、あなうめテスト作成サイト、多読サイト等を公開している。近年、思考力を育てる言語教育の方法、特に問い合わせや複数テキストの批判的統合に関心を持っている。

情報処理型の作業は今後AIが担う部分が大きくなるであろうが、価値判断はAIに委ねるべきではない。言語教育の場においても世界観・人間観・教育観を踏まえて望ましい社会の方向性を考え、対話し調整できる人材の育成が重要である。生成AIは言語学習においても有効活用できるが、価値の重みづけや創造的な発想、情報検索の信頼性には問題が多い。AIを過信せず、その特徴を理解したうえで補助的に活用しつつ、人間が主体的に価値判断を含む批判的・創造的思考を鍛える言語教育の方法について、具体例を紹介しつつ論じたい。

阿部真育（山口県立大学）



北海道大学大学院 環境科学院を修了後に建設コンサルタント会社に勤務。勤続中に京都大学大学院にて経営学修士（MBA）と博士（工学）を取得。北海道大学 数理・データサイエンス教育研究センターにてデータサイエンスの教育研究に従事。2022年度から現職。

人間の5歳児の言語獲得するために、人間は 6×10^7 の語彙で実現できるのに対して、AIは 5×10^{11} の語彙学習を必要とするという報告がある。しかしながら、AIは本当の意味で語彙を“学習”しているのであろうか？この問い合わせについて、講演者が関わったAI開発コンペティションを例に挙げて、参加者と共に議論したい。

井上逸兵（慶應義塾大学）



慶應義塾大学法学部、文学部卒、文学研究科修了、文学博士。富山大学、信州大学を経て、現在、慶應義塾大学文学部教授。専門は社会言語学、英語学。元慶應義塾中等部長（校長職）、NPO法人地球ことば村・世界言語博物館理事長、社会言語科学会会長、言語学コミュニケーター、エッセイスト、動画クリエイター／プロデューサー

翻訳も要約も会話補助もAIが担う時代に、外国語学習を「便利だから」だけで語るのは弱い。むしろ問うべきは、外国語で何を“できるようになる”のかです。私が強調したいのは「人を動かす英語力」——正確さ以上に、相手の関心を読み、配慮を示し、信頼を作り、提案を前に進める力です。AIは文を整えてくれても、場面の空気、関係性、冗談の温度、押し引きのタイミングまでは保証しない。だからこそ学習は「正しく言う」から「相手に届く形に設計する」へ移る。外国語は他者理解と自己相対化の装置であり、説得・協働・リーダーシップを支える実践知でもあります。AIを道具にしつつ、その核を磨きます。



麻生園加・平野友梨（山口県立大学4年）

山口県立大学国際文化学部国際文化学科4年。日本語教育研究室所属。卒業制作として、日本語の漢字学習デジタル教材を制作。

日本の漢字学習デジタル教材「かんじのがっここう」を制作。本教材制作の背景には、日本語を習得する上で欠かせない常用漢字の学習の重要性と、言語的背景に関係なく誰もが一つの教材で漢字を学び、習得し、実生活で使えるようになる未来を実現したいという想いがあります。本発表ではその制作過程と成果物について報告します。